

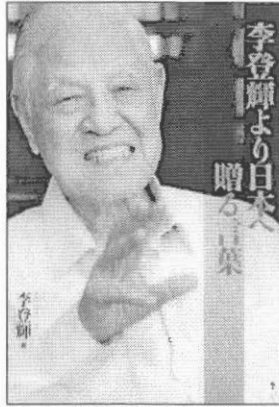
李登輝より日本へ  
贈る言葉

李登輝著

ウェッジ  
2,592円(税込み)耳の痛い箴言  
心揺さぶる金言

評者

丹羽 文生

拓殖大学海外事情研究所  
准教授

## 本書の主要目次

- 第1章 再生する日本  
第2章 李登輝の台湾革命  
第3章 中国の歴史と「二つの中国」  
第4章 尖閣と日台中  
第5章 指導者の条件  
第6章 「武士道」と「奥の細道」  
第7章 これからの世界と日本

世界のリーダーの中で著者ほど日本人に知悉している人物はいないだろう。本書は、現代の日本社会から失われつつある武士道の精髓を自らの生き方に反映させている著者の人生の集大成とも言える一冊である。

言うまでもなく、かつて日本と台湾は一八九五年四月から五十年間にわたって歴史を共有した。この間、本書にも登場する「台湾近代化の父」こと後藤新平を始め、多くの日本人が台湾近代化に挺身し、社会資本整備、衛生施設拡充、産業振興、教育普及に努めた。そのため、外交関係こそないものの、台湾では今でも当時の日本に対する感謝の念が息づいており、親日感情が強い。二〇一一年三月十一日の東日本大震災において世界でも群を抜く巨額の義援金が日本に寄せられたことが、このことを象徴している。しかも、その大半が市井の一般人からの寄付であった。

それだけに今の日本の暗澹たる状況を憂うる台湾人も少なくない。著者も、その一人である。

「夜ベッドに入っても、朝目覚めても、頭をよぎるのは、これから台湾がどうなっていくのかという思いです。と同時に、日本のこともそれ以上に気懸かりでなりません」という。元日本人とは言え、外国人である著者に、ここ

まで心配させているというのは、日本人として実に恥ずかしいことである。

日本統治下の台湾で臨時台湾糖務局長として糖業改良に努め、英文「武士道 (Bushido: The Soul of Japan)」を著したことで知られる新渡戸稲造に心酔する著者は「武士道」は人類最高の指導理念と言っても過言ではありません」と強調し、「それを生み出した日本では、『武士道』も『大和魂』も終戦以降、ほとんど見向きもされない状況にあります」と述べ、日本人の「過去」に対する全否定、すなわち自らの歴史への「自虐的価値観」が今日の日本の混乱原因にあると説いている。確かに、親殺し子殺しといった残忍で非道極まりない凶悪犯罪、リーダーと呼ばれる人々による自己保身のための責任逃避や腐敗に汚職、金儲け優先のモラルなき拝金主義的経済と、これら「国家の根幹を揺るがしかねない問題」は、武士道という道徳規範が国民精神の支柱とされていた時代には見られなかった現象である。

ところが、敗戦を境に「GHQの占領政策によって、かけがえのない日本精神がすべていったん否定されてしまった」ことで、長い歴史の中で日本人が醸成してきた、「私」を犠牲にしても「公」に殉ずる覚悟、著者の言葉を借りれば「私は私ではない私」という気概

を忘れ、加えて、国への愛情や誇りを著しく劣化させてしまった。これらは著者の言う通り「戦後の自虐的価値観と無関係ではない」と言える。

著者の指摘は「偉大な国家を滅ぼすものは、けっして外面的な要因ではない。それは何よりも人間の心のなか、そしてその反映たる社会の風潮によって滅びるのである」というベニスの歴史家であるジヨバンニ・ボテロの言葉が彷彿される。国の衰亡は「外」ではなく「内」から引き起こされるのである。本書には、日本人にとって耳の痛い箴言、心を揺さぶる珠玉の金言が数多く散りばめられている。二二歳まで日本人として育った著者の中にある「かくすればかくなるものと知りながらむにやまれぬ大和魂」(吉田松陰)が、彼を突き動かしているのではないだろうか。

しかし、単にページを捲って感心しているだけでは全く無意味である。言行一致、率先垂範、実践躬行が武士道の行動美学であり、「日本精神(リッピンチエンシン)」の基本であることを忘れてはなるまい。

著者曰く台湾人の多くは「日本がもっと強くなり、国際社会のなかで存在感を示してほしい」と願っているという。期待に応えようではないか。